

倉本尚徳著『北朝仏教造像銘研究』

(法蔵館 2016年3月 B5判 701+17頁 25,000円+税)

北村 一 仁

はじめに

『北朝仏教造像銘研究』(以下本書と略記)は、倉本尚徳氏(台湾中央研究院助研究員)が、二〇一六年に法蔵館より上梓した書である。倉本氏は北朝～隋唐仏教史を専門とする研究者である。本書は、氏が二〇一一年に東京大学に提出した博士論文に基づくものであり、現時点における氏の研究の集大成かつ、今後の研究の基盤となるものと言えよう。

本書はB5版、目次・凡例込みで七三〇頁(うち本文五四四頁)にも及ぶ、文字通り大部なものであるため、限られた紙幅で全面的な紹介・批評を行うことは難しい。また評者自身も北朝期の造像銘を扱ったことはあるものの、仏教学については門外漢である。よって本書評では、概要を紹介したのち、評者の興味に引き付け、歴史学、特に地域史的側面から感想を述べることにしたい。

(目次:()内は初出書誌情報)

序論 (書き下ろし)

第一部 邑義造像銘の概要とその地域的特徴

第一章 北朝邑義造像銘の概要と感応思想(書き下ろし)

第二章 義邑の地域的特徴について(書き下ろし)

第三章 北朝時代の関中における道仏二教の義邑について

(原題「北朝造像銘にみる道仏二教の関係——関中における邑義の分析を中心に」『東方宗教』一〇九、二〇〇七に加筆修正)

第二部 造像銘と仏教経典

第一章 北朝時代の多仏名石刻——懺悔・称名信仰と関連して——(原題同、『東洋文化研究所紀要』一五四 二〇〇八)

第二章 北朝時代における方等懺と称名信仰——『大方等陀羅尼経』十二夢王石刻図像の新発見とその意義——

(原題「北朝時代における方等懺と好相行——『大方等陀羅尼経』十二夢王石刻図像の新発見とその意義」『仏教文化研究論集』一二 二〇〇八)

第三章 南北朝時代における『大通方広経』の成立・流布とその懺悔思想

(原題「南北朝時代における『大通方広経』の成立と受容——同経石刻仏名の新発見」『中国哲学研究』二三、二〇〇八、

及び「『大通方広経』の懺悔思想——特に『涅槃経』との関係について」『東方学』一一七、二〇〇九)

第四章 北朝期における『菩薩瓔珞本業経』実践の一事例——陽阿故県村造像記について——(原題同、『東アジア仏教研究』八、二〇一〇)

第五章 『高王観世音経』の成立と観音像

(原題「北朝石刻資料よりみた『高王観世音経』の成立事情」『明大アジア史論集』一八、二〇一四)

第六章 『観世音十大願経』と「観世音仏」(原題「北朝石刻にみる『観世音仏』信仰」『印度学仏教学研究』五七 - 一、二〇〇八)

第七章 北朝・隋代造像銘に見る西方浄土信仰の変容——『観無量寿経』との関係を中心に——

(原題「北朝造像銘にみる禅師と阿弥陀信仰:「無量寿」から「阿弥陀」への尊名の変化に関連して」『印度学仏教学研究』五七 - 一、二〇〇八 及び「北朝・隋代の無量寿・阿弥陀像銘——特に『観無量寿経』との関係について」『仏教史学研究』五二 - 二、二〇一〇に加筆)

結論 (書き下ろし)

附録 別表、書名・雑誌名略称一覧、参考文献一覧、初出一覧、あとがき、図版典拠、中文要旨、英文目次

一 本書の概要

まず序論では、造像銘が持つ史料価値について述べ、その長所として、作られた日時と場所がわかるものが多いということと、定型的表現が多く、これに基づき統計的な考察を行うことで、地域性・時代性とその変化を知ることができるということを挙げる。そして本書の目標として「造像銘を主な資料として、北朝地域社会において行われた主体的仏典解釈に基づく仏教実践と信仰の具体的様相を明らかにする」(六頁)ということ掲げ、第一節では造像銘・造像記、地域社会、偽経、義邑・邑義という用語の定義を行い、第二節では先行研究の検討を行った上で、先行研究では不十分な、各地に残された北朝後期～隋代の造像銘から、「地域社会における仏教信仰と実践の様相を…地域性の問題を重視しつつ明らかにする」(一九頁)という課題を提示する。続いて第三節ではそ

の考察に用いる資料と方法についてまとめ、本論に移る。

その本論は二部に分かれる。まず概要について、第一部は「邑義造像銘の概要とその地域的特徴」と題し、網羅的に資料を収集・整理・分析し、統計的手法により、全面的な考察を行う。この第一部がいわば総論であるとすれば、対して第二部は各論であり、「造像銘と仏教經典」と題して具体的な造像銘を用い、特に仏教經典を中心として、先に設定した課題を解決すべく、精緻な考察を重ねる。

それでは内容に関して、具体的にみていこう。まず第一部第一章、第一節においては、造像を行う単位の呼称である「邑義」「義邑」などの語について、先行研究を踏まえ、複数の事例を検討する。本来は「邑」こそが集団の呼称にふさわしいものの、「邑」字自体の意味が多岐に亘るため、便宜上「義邑」を用いるべきであると述べた上で、本書での定義として、「義邑」は造像などを行う集団を指す分析概念、「邑義」はその成員、邑義による造像を「邑義造像」と規定する。次いで二節では、このように定義された「義邑」に関する先行研究をまとめ、そこから、造像銘文の典拠となる經典を調査検討することで、「邑義造像」の背景となる思想を、地域的差異に留意しつつ明らかにするという課題を導き出す。三節では「邑義造像」銘の内容について、九項目（紀年月日・題・仏法の意義と造像の意味・「義邑」の創唱者と像主・発願の経緯と造像の経過・尊像名・像の形容と立地・願目・供養者名）に亘り、事例を挙げて描き出し、造像活動においては感応思想が重要であることを指摘、四節においてこの感応思想について考察、造像の思想的根幹に感応思想があり、それは法身と衆生とを結びつけるものであり、その媒体として仏像が造られたとした。

第二章では、「義邑」の地域的な特徴に関して、第一節では四二五件の造像銘に基づき、邑義の肩書に基づいて地域区分を行う（五つの大区分・八つの中区分・十四の小区分）、この区分を踏まえ、第二節では各地域の「義邑」の特徴をさらに詳細に描く。先の小区分に基づき、掻い摘んでまとめると、Aの雲崗・龍門においては邑師→邑主→維那→邑子という基本形が形成されており、Bの河南黄河以南では浮図・天宮・塔が多く、Cの河南黄河以北では一光三尊像が多い。Dの山西中南部では龍門石窟以前にさかのぼる古い時代のものが多く、千仏・多仏信仰が見られ、Eの山西南西部では名族薛氏らによる造像碑が多く、扶像主など特徴的な役割が見られるほか、北朝後期では政治的軍事的性格が濃厚であるとし、Fの山西河北境（太行山脈）では鄴と晋陽とを結ぶ交通路沿いに造像が多く、高氏を意識した内容のものが多くという。Gの渭北地域及びその西・南（H）、東（I）、北（J）およびKの陝西西部から隴東にかけては類似点が多く、北魏期のものでは最も多くの種類の肩書が見られるという。さらにGでは北魏期に限り道仏二教像が多く見られる。Lの河北・山東北部と西部では、北魏期には涿県と中山のみにしか現れ

ないが、北朝後期に至ると鄴を中心に広く見られるようになる。隣接するMの河北黄驊・山東無棣（すなわち渤海沿岸、河北・山東省境付近）では王主比丘・王母など独特の肩書が見られる。最後、Nの青齊では一光三尊像が多く、一般会員は法義と呼称されると述べる。

第三章では、前章で区分した地域のうち、道教との混交が見られる陝西関中地域を採り上げ考察。従来、曖昧に「道仏二教混淆造像」ととらえられてきたものが、南面に仏・道のどちらが刻まれたかということを手がかりとして、道仏像と仏道像に区別でき、当地の造像は仏像・道教像を含めた四種に分類できると指摘した。その後多くの造像銘を採り上げ、老子化胡説との関連などから、同説が当地の二教像碑の流行に対して大きな影響力は持っていなかったこと、あるいは北魏末の北地郡での動乱と以後の道教・道仏像の減少との関係について、その背景には同乱を通し、羌族らの地位上昇があったことなどを検証した。

次いで第二部では、仏教經典と仏教石刻との関係を具体的に検討、造像銘に見られる思想内容について詳細に考察する。第一章では、銘文に見られる仏名について、その仏名の典拠となる經典を解明しつつ、仏名信仰の特色について考察する。まず第一節では多仏名に関して概観、大きく過去・現在・未来という時間的広がり及び、四方・四維・上下という十方の空間的広がりを表すものに分けられるという。第二節では、それら多仏名が刻まれた北朝期の石刻十二例を具体的に検討、特徴として、地域的には山西・河南両省に多く、特に山西は千仏造像碑も多いことから、造像と結びついた多仏名信仰が盛んであったと述べ、年代的には東西魏分裂以降に増加、その背景として民衆の仏教理解が進んだことなどがあると指摘、刻む仏の選択については三世仏・十方諸仏を組み合わせたものが多いこと、実践的な性格が強い偽経と関係が深い仏名が多く見られること、単立の造像碑では多数の供養者が関与したものが多いことなどを挙げる。そしてこのような北朝期の雑多な多仏名信仰は、唐代にかけて整理されていったと述べる。

第二章では、山西省晋州市沢州県の青蓮寺出土で、現在同市の晋州博物館に展示されている、北齊乾明元（五六〇）年『大方等陀羅尼經』十二夢王石刻を手がかりとして、方等懺の実践に関わる神秘的要素や称名信仰、及び義邑の仏教実践等に見られる地域的性格について考察する。第一節で方等懺の概要について述べたあと、第二節で僧伝における事例を検討、その事例がともに山西省南東部に現れたことを指摘、第三節では件の石刻を分析し、その銘文が北魏・唐のテキストの両方とも異なるとする。第四節では十二夢王が刻まれた意義について考察、その背景として十二夢王を見るという神秘的体験が陀羅尼・授法において必須であること、十二夢王が持つ救済者的性格があったことを指摘する。第五節では敦煌本の『陀羅尼經』を検討、同経や方等懺法による神秘的体験

が持つ意義・重要性を説く。そして結論としてこの石刻は方等懺を重んずる当地の気風を反映したものとする。

第三章では、『大通方広経』(以下、『方広経』)の成立・流布について考察する。まず第一節ではその成立について検討、六世紀前半、南朝梁初の成立と推測、梁の荊襄(湖北)から北魏、西魏北周・隋というルートで広まったとする。そして同経が刻まれた造像碑として河南の一点、山西南部の二点の計三点を提示する。第二・三節においては、その中の一つ、北周保定二(五六二)年山西省運城市出土、山西博物院所蔵の「陳海龍造像碑」を採り上げ分析を加える。同碑に刻まれた仏名は、『方広経』が典拠とした経典を参照したのではなく、『方広経』もしくはそこから派生したマニュアルに基づき刻まれたとする。そして同碑には斎主として比丘・比丘尼の名が多く見られることから、彼らの指導の下、『方広経』に基づく懺法=方広懺が行われていた可能性が高いと見る。第四節では敦煌文献S四四九四の方広懺断片を検討、第五～八節において『方広経』の内容を考察、三宝の礼拝称名による懺悔によって救済されることを明確に主張したものとする。そして最後にまとめとして、仏名信仰と密接につながる『方広経』との関係を示す造像碑が山西で見られたことは、当地の特色たる、造像と結びついた仏名信仰の一端を窺わせるものとして興味深いと述べる。

第四章では、「陽阿故県村造像記」に基づき、その基礎となっている『菩薩瓔珞本業経』との関係を考察する。ただ本造像記は現物ならびに拓本の存在が確認できておらず、『山右石刻叢編』および『鳳台県志』に録文があるのみであるため、まず碑の実態について復元を図る。その概要について、所在地は沢州県大陽鎮付近(当時の陽阿県)とされ、当地の有力者劉氏を中心として、郡太守など総勢二〇〇人余りが参加した大規模なものであったとする⁽¹⁾。第三節においては造像記の銘文を元に、『菩薩瓔珞本業経』との対応関係について、丹念に分析を加える。その結果当記は同経に基づきつつ、多少の相違点も見られるという。『菩薩瓔珞本業経』との相違点としては、四十二賢聖という階位の数を、十信を加えた五十二とした点や、等覺の観法(特に修行として仏の尊顔を観ずる点)などがあり、その背景には多仏信仰や称仏名など、当地特有の仏教実践があったという。さらに第五節では碑文に現れる輪王についても考察、転輪王が重視されていることを指摘。最後にまとめとして当碑は菩薩戒を説く経典に依拠する、北朝期における唯一の事例であると、その重要性を強調する。

第五章では、観音信仰の新たな展開を示す偽経である『高王観世音経』をめぐる、成立事情・信仰の様態を考察する。まず先行研究を整理、その中の牧田諦亮・桐谷征一の研究を手がかりとし、北朝期の造像銘に基づき、特に同経と高歓、そして観音像の関係について検討する。第一節において牧田の高王=高歓説について、諸史料に基づいて

補強、続く第二節で孫敬徳の靈驗譚および、観音像との関係に言及、第三節では河南省鶴壁市の五岩山摩崖・石窟などの実例を挙げつつ、高王寺と観世音像について考察を加え、高歓の名を冠した寺院が複数存在したことを指摘、加えて東魏・北齊では観音像が重視されたことを明らかにし、その背景として孫敬徳に関する観音像と『高王経』の靈驗譚があると述べた。第四節ではその『高王経』の諸テキストについて比較分析したうえで、本経は読誦することによる現世利益的功德を強調したものであったとする。そして最後に仮説として『高王経』は、高歓のとりまきの諸僧によって、当時河北で盛んであった観音信仰が利用され、読誦すれば功德を得られる経典として作成され、それを孫敬徳の靈驗譚・観音像の制作とセットとし、高王=高歓を観音の化身であると設定したのではないかと述べた。

第六章では、引き続き観音信仰に関するものとして『観世音十大願経』を採り上げ、「観世音仏」に関わる信仰の様態を考察する。第一節では観音成仏を説く経典を概観、第二節では石刻資料および敦煌文献に見える観音およびその信仰について検討、続いて第三節では釈迦と観音を結びつける意図が見える『観世音十大願経』が刻まれた石刻銘文二点を採り上げて考察。結論として南北朝期では観音信仰の盛行とともに、その来歴や釈迦との関係についても関心が高まっていったことが、石刻などから推察されたとした上で、観音は釈迦の滅度後の救済者として位置づけられ、それが観音の本願であったと述べる。

第七章では、西方浄土信仰について、北朝～隋代の造像銘を手がかりに検討。第一節では生天・浄土信仰を含む北朝～隋代の造像銘を整理、そこに現れる各用語(「亡者生天」「浄土」等)の地域的・時間的特徴を明らかにし、同信仰の全体的な動向を把握、五二九年以前は天に生まれたいという信仰が流行、以降は西方浄土の信仰が優勢になることが確認でき、地域的に見ても現れる用語に偏りがあると述べる。続く第二節では多数の造像銘に基づき、統計的手法で以て「無量寿」から「阿弥陀」への変化が北齊後半期の河北を中心に起こると推測、第三節では複数の造像銘の銘文を分析し、北齊後期に至り阿弥陀信仰がより明確に表現されるようになったとする。第四節では鄴城付近から新たに出土した、北齊天保元(五五〇)年紀年の白石阿弥陀像を検討、阿弥陀像としては最初期のものであり、その銘文には新たな浄土信仰が現れており、また阿弥陀像と禅観との結びつきが強く意識されるものであるとする。第五節ではこの禅観に着目、「禅師」と阿弥陀造像の関係について、僧稠の禅観窟たる小南海石窟中窟を分析、北齊の阿弥陀造像の興起には僧稠ら太行山脈周辺の「禅師」たちが重要な役割を担ったと述べる。第六節では小南海石窟内に見られる浄土浮彫の典拠ともなった『観無量寿経(観経)』に着目、三点の造像銘を分析し、禅師たちが新たな西方浄土教を広める上で、同経の思想を反映

した仏像を造り、その尊名も無量寿から阿弥陀に改め、新たな浄土思想であることを表明したと結論付けた。

そして最後に結論として、概要を述べた後で北朝後期、特に東魏・北斉の造像活動の特徴について、①尊格の多様化 ②地域的特色を有した義邑による造像活動の全盛期 ③偽経の積極的活用による地域社会における仏教実践の普及 ④仏名信仰の興起 ⑤偽経に基づく観音信仰の称揚 ⑥阿弥陀造像の興起 ⑦教学と実践との密接な関係 という七点にまとめ、本書の考察を締めくくっている。

二 本書の学術的意義と長所、今後の課題

以上が本書の概略である。その内容についていえば、取り扱う史料・資料に関しては、フィールドワークを含めて膨大な事例を収集・整理した上で、周密な史料批判を行い、このような過程を経た史料に基づき、多方面からの考察を行っている。また全体の構成については、第一部で全面的考察を、第二部で個別のかつ詳細な分析を行うという、広い視野と深い洞察を両立させ得る手法によって、多岐に亘る内容をわかりやすく提示している。このように大部かつ濃密な研究成果を世に示した倉本氏に、まずは敬意を表したい。

本書の最大の意義は、各地で制作された造像銘が、どのような歴史的・社会的・地域的背景に基づき、具体的に如何なる仏教經典に依拠し作成されたのかという問題について、多面的かつ系統的に考察されたという点であろう。これらの考察によって、造像銘が如何にして成立したか、当時の人々は具体的に如何なる仏教信仰を有していたのか、それらの地域的特徴はどうであったかなど、明らかになった点が多い。

特に評者が感銘を受けた点を挙げてみると、「義邑」集団に属する諸人の肩書など、地域性という視点から、膨大な事例が整理されている点がある。この整理ということに関しては、随時新たな銘文が現れるため、その都度再検討していくことが必要ではあるが、次のような推定を行う場合非常に役に立つ。すなわち、現在日本・欧米・韓国などに、多数の造像碑が流出しているが、その多くは出土地不明とされており、それゆえに史料価値も半減してしまっている。美術史方面からの推定もなされてはいるが、いまだ不十分な点が多い。ただ、その上に倉本氏の分類に基づき検討を加えれば、さらに詳細な推定が可能となる。一例を挙げると、韓国国立中央博物館所蔵、北斉～隋のものとされる「殷那兒等邑義造像碑」(同館図録『中国造像碑』二〇一五年、四二頁)があるが、出土地は不明である。ただその銘文中には、衝夫(天)王主・上転主などの肩書が見られる。これは倉本氏の指摘によれば、山西省南西部を中心とする山西省南部一帯に見られ

る特徴と合致する。即ちこの碑もまた当地出土である可能性が高いということが導き出せる。このようにある程度の目星をつけ、さらに石の材質・仏像や邑子像などの図像的特徴・銘文に現れる官職や姓の傾向などと併せ考えるならば、出土地の推定・確定を行うための基礎を築くことができるのである。

このほか、仏教信仰およびその信仰対象の地域的な差異や、中国における仏教(特に民衆仏教)と所謂偽経・中国撰述經典との関係など、仏教学・仏教史学・中国史学の多方面において、造像銘を通して今後検討していくべき問題点を掘り起こし、或いは新たな研究視角を提示したというのも、全て本書の長所である。

一方で、課題になると思われる点を数点挙げたい。まず大まかな課題としては、碑に刻まれた図像に対する検討に、不十分な点があるという点が挙げられよう。もちろん部分的には検討されている箇所もあり、そもそも本書はあくまでも「造像銘研究」であるため、瑕疵とまでは言えない。しかし氣賀澤保規が指摘するように、「文字と図像の両面を同じ土俵において論ずる」ことで、初めて仏教石刻が持つ意味を十全に理解できるのである⁽²⁾。よって今後は(評者自身も肝に銘じるところであるが)、銘文と図像双方への目配りがさらに重要になってくると考える。

次いで、氏は地域社会をテーマの一つとして掲げているが、地域社会で「義邑」「邑義」が担っていた社会的役割、あるいは歴史的意義という点に関しては、いまだ考察が不十分な点があることが否めない。氏の関心及び本書の論点はあくまでも「仏教信仰と実践の様相」にあるため、あえて省略したとも考えられるが、南北朝期の仏教や僧侶・仏教教団は、宗教的役割のみを担っていたわけではなく、現実の社会生活においても、例えば少し時代は異なるが、家僧・門師や、間諜として働いた僧侶⁽³⁾など、俗世での役割に従事していた者もいる。よって一章あるいは一節を設け、この点に関する問題(石刻からわかる一例を挙げると、例えば義井や義橋の建造・修築等の公共事業⁽⁴⁾)について言及したならば、本書の幅はさらに広がったように思う。

あと、地域的な濃淡で言えば、氏の研究は河北(一部山東も含む)・河南・山西、つまり東魏・北斉の領域については詳しいが、陝西・甘肅、すなわち西魏・北周の領域に対する考察については、僅かに第一部第三章で行われるのみで、その後ほとんどなされておらず、この点に些かの不満が残る。この地域は、氏も言及するように、漢族のほか様々な胡族が混住し、さらに道教と仏教が混在する興味深い地域であり、北周仏教、さらには隋唐にかけての仏教を読み解く上で、重要な場所であったということはいうまでもない。さらにいえば、当地は西域との門戸にあたる地域でもあった。北朝から隋唐にかけ、如何なる交流がなされ、如何なる変容を遂げていったのか。敦煌における事例をも視野に含める形で、倉本氏のさらなる研究に強く期待する。

以上、拙いながら感想を述べてきた。恐らく少なからぬ誤解や、読み落としがあるであろうが、その点に関しては倉本氏及び本誌読者の寛恕を請いたい。またいくつか挙げた課題に関しては、あくまでも評者が考える（あるいは倉本氏に希望する）今後の課題に過ぎず、本書の価値を落とすものではない。この書評執筆を通じ、評者自身気づかされた点が多く、本書が北朝造像銘研究の新たな基盤・出発点となり得る研究であることを実感した。氏の今後の研究の進展を祈りたい。

注

- (1) ちなみにこの劉氏について、倉本氏は注三一にて高平郡の郡姓を検討し、『劉』氏の名は見えない」と述べているが、氏が示す『新集天下姓望氏族譜』には、独孤氏の名がある。この独孤氏は、北魏期に劉氏に改めた（『魏書』卷一一三官氏志、また姚薇元『北朝胡姓考』（中華書局 一九六二）三八頁も参照）ので、当碑の劉氏も、もともとは独孤氏だったかもしれない。
- (2) 「序論 中国中世仏教石刻の地平」（『中国中世仏教石刻の研究』勉誠出版 二〇一三）三頁。
- (3) 藤善真澄「六朝佛教教団の一側面 間諜・家僧門師・講經齋会」（川勝義雄・礪波護編『中国貴族制社会の研究』（京都大学人文科学研究所 一九八七）所収、後『中国佛教史研究 隋唐佛教への視角』法蔵館 二〇一三 に再録）。
- (4) 張総「義橋・義井・邑義一造像碑銘中所見到的建義橋・掘義井之仏事善舉一」（『世界宗教文化』一九九七・四）参照。

六朝樂府の会編著『『隋書』音楽志訳注』

（和泉書院 2016年2月 A5判 570頁 10,000円＋税）

戸川 貴行

本書は『隋書』音楽志上・中・下に、本文、書き下し文、現代日本語訳、語注を施した優れた訳注書である。「前言」では、『隋書』音楽志の内容について、渡辺信一郎氏の大著『中国古代の樂制と国家—日本雅樂の源流—』（文理閣、2013年）等を取り上げつつ、簡にして要を得た解説がなされている。さらに、巻末の索引は、「人名」、「樂曲・書名」、「事項」の順に三別されており、音楽史を研究する上での検索に極めて便利である。なお、「凡例」では、本書の方針として、「同志に収録される各王朝の祭祀歌辞については、これを省略した。」という（本書xiv頁）。

一 本書の構成および語注の紹介

まず本書の構成を以下に掲げる。研究書の場合であれば、続いて内容を要約すべきところであるが、本書は前言が大変優れており、かつ史料の訳注でもあるので、代わりに語注の注目すべき箇所を紹介したい。

序

前言

凡例

『隋書』音楽志上

- （1）樂の起原とその展開—古代から北魏まで—
- （2）梁王朝の宮廷音楽—武帝の樂制改革—
- （3）梁王朝の宮廷音楽—武帝の樂律改革—
- （4）梁王朝の宮廷音楽—武帝の郊廟樂改革・懸鐘磬の法—
- （5）梁王朝の宮廷音楽—祭祀儀礼の次第—
- （6）梁王朝の宮廷音楽—燕饗樂・百戲—
- （7）梁王朝の宮廷音楽—鼓吹樂・歌謠・仏曲—

陳王朝の宮廷音楽—武帝期の雅樂—

- （8）陳王朝の宮廷音楽—祭祀儀礼の次第・燕饗樂・百戲—
- 『隋書』音楽志中